

### 3.2 「里浜づくり」のアイデアと行政に期待される取り組み

#### (1) 「気づき」のきっかけを生かそう

もし、あなたが地域の海岸について何かに気づいたとしたら、それが「里浜づくり」活動のきっかけになります。例えば、①少しずつ進行していた環境の変化、あるいは、②海岸整備などの事業による人為的で短期間な変化、または、③他地域からの移住者・専門家等により見いだされた新たな価値など、これらに「気づく」ことです。「里浜づくり」の活動は、地域の海岸にある価値や問題を発見することがきっかけとなり始まります。

#### 【解説】

「里浜づくり」の活動は、地域の海岸に大小関わらず様々な変化があることに「気づく」こと、地域に当たり前にあるものについて新しい見方により新たな価値に「気づく」こと、また、これまで海岸に近づけなかった世代とともに海岸を訪れることでその空間の利用価値に「気づく」ことなどをきっかけとして動き出します。その「気づき」が行われるように、地域の海岸をよりよく知る機会を設けることが大切です。

「里浜づくり」活動事例では、表のようなきっかけで、「里浜づくり」の活動が始められました。ここに、あなたと同じような「気づき」はあるでしょうか。もしあるならば、あなたも「里浜づくり」の活動を始めてみてはいかがでしょうか。ここに同じような事例が挙げられてなくても、今、同じような「きっかけ」で活動を始めようとしている人々が全国の海岸のどこかにいるかもしれません。それどころか、あなたのその「気づき」が、全国的にみても初めての一步になる可能性があります。

あなたも、その「気づき」から、はじめてみませんか？

#### 【行政関係者の方々へ】

##### <地域活動している人や団体と交流をもとう>

地域の海岸や浜辺で、どのような人々が活動しているのか、あるいは、近隣の住民で、地域づくりや地域活性化のために積極的に活動している人々の存在について、常に関心を持って情報収集をしておきましょう。現場やなんらかの会合で会ったときには、情報交換を行う等、日ごろより、交流を持ちましょう。普段から地域の人々と良好な関係を築く努力が求められます。

「里浜づくり」活動のきっかけ（「里浜づくり」活動事例より）

「気づき」の種類		事 例
環境の変化	生物	<ul style="list-style-type: none"> <li>カブトガニの繁殖指定地であるが、その生息数は減少していたので、保護活動として海岸清掃を始めた。【笠岡港海岸、東予港海岸】</li> <li>離岸堤に着生した珊瑚が発見され、それは種類が豊富で、稀な種が含まれていることが調査で分かり、その珊瑚を通して、他地域との交流を目指した。【奈半利港海岸】</li> </ul>
	海岸	<ul style="list-style-type: none"> <li>豊かな恵みがあった海で、その恵みが乏しくなってきたので、地域環境の総点検として、海岸でも近自然工法ができないか検討をはじめた。【木野部海岸】</li> <li>日本三大松原の一つである「気比の松原」を砂浜の侵食から保護するため、まず松原と海岸の清掃を始めた。【敦賀港海岸】</li> <li>地域の海岸がごみであふれている状況を見て、住民が海岸清掃を始めた。【豊浜港海岸】</li> <li>漂着ごみや島で発生するごみの増加から、住民と来訪者の有志がNPOを設立し、海岸清掃活動を始めた。【仙台塩竈港海岸】</li> <li>油の流出事故等があり、地元海岸の減少している鳴き砂を守るために活動を始めた。【平海岸】</li> </ul>
事業等による変化	海岸整備・計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>ふるさと海岸が完成して、海水浴が可能となり、緑地もあるので、周辺地域からの注目も集まっていると考えて、浜辺の清掃活動を始めた。【青森港海岸】</li> <li>重要港湾になるにあたり、干潟やカブトガニの幼生の存在が確認されたことなどをきっかけに、子どもたちに残せる地域の海岸を目指して活動を始めた。【中津港海岸】</li> <li>海岸整備事業で緑地等ができ、その緑地の利用で、住民に「海岸は我が町の一部」とする意識が芽生えた。【方財海岸】</li> </ul>
	施設立地	<ul style="list-style-type: none"> <li>別荘開発を食い止めようと、市民有志による保全活動として、全国から集めた募金で予定地を買い取るナショナル・トラスト運動を始めた。【文里港海岸】</li> <li>大阪湾の埋立地に立地している市立の市民団体活動拠点施設があり、その活動団体が、施設前面にある海岸を野外活動の場として始めた。【二色港海岸】</li> </ul>
他の地域・違う世代の人	移住者	<ul style="list-style-type: none"> <li>県外から地域の大学に入学した学生を主に、「地域に根ざした活動」として、ライフセービング活動を始めた。【大竹海岸】</li> <li>主に地域外からの移住者により、海岸を中心とした地域の魅力を見つけ、海岸を利用して何かできないかを考えて実践するために活動が始められた。【運天港海岸】</li> <li>松林と白浜という地域の美しい自然を好きな人が移住してきて、海岸環境の保護のため海浜清掃を始めた。併せて、地域住民による清掃活動も始められた。【阿児港海岸】</li> </ul>
	専門家（地域外の人）	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域住民は鳴き砂の存在を知ってはいたが、地域外の大学教授が、鳴き砂の知識と重要性を教えてくれたことをきっかけに、保護活動を始めた。【琴引き・八丁浜海岸】</li> <li>海外での経験がある専門家がきて、海水浴の利用だけでなく、通年利用でビーチスポーツが楽しめる海岸を目指して、ビーチクラブ活動を始めた。【平塚海岸】</li> </ul>
	子ども（児童）	<ul style="list-style-type: none"> <li>総合学習時間に訪れた浜辺にごみがたくさんあり、児童中心のボランティアサークルとして清掃活動を始めた。【渥美海岸・西の浜海岸】</li> <li>子どもたちの日常的な遊び場として、安心・安全な浜辺にするために活動を始めた。【尼崎西宮芦屋港】</li> <li>地元小学校より伝統的漁法を学びたいと要請をきっかけとして、漁協青年団が中心となり活動を始めた。【久手港海岸】</li> <li>子どもたちが地域の自然の魅力を見つけられるように、山・川・海とフィールドごとにあった自然体験活動団体を統合した。【酒田港海岸】</li> </ul>

## (2) 地域を学ぼう

地域の海辺で発見した価値や問題について、その理由を探る、あるいは、今後の対応を考えるために、海辺と人々のつながりを学習してみましょう。

学習は、まず気軽に始められるものとして、①インターネットを活用するなどして情報収集することや、②海岸をフィールドとして実際に体を動かして体験することが挙げられます。さらに進めて、③地元の古老、地域に詳しい人や専門家に話を聞くこと、あるいは、④実態を詳しく知るために調査・研究を行うことなどが考えられます。また、学習を通して、さらに、新たな価値や問題を発見することもあります。

### 【解説】

地域の海辺で発見した価値や問題に対して、「なぜ?」「どうすればいいかな?」と思ったら、まず、海辺、地域住民、そこを利用する人々、海辺やその周辺地域で、どのようなことが起こり、どのようなことが行われているのか、学習してみてもいいでしょう。

「里浜づくり」の活動事例にみる学習として、「情報を集める」、「フィールドで体験する」、「話を聞く」、「調査・研究を行う」の4種類を挙げました。ここで挙げている事例は、各団体が組織として行っている学習であり、これが学習のすべてというわけではありません。

海岸の行政主体は、「海岸管理者」です。海岸管理者は、通常、一部を除き都道府県知事あるいは政令指定都市の市長です。具体的に情報を入手する場合等は、その海岸が港湾の管轄なのか、漁港の管轄なのか、干拓地なのか、それ以外なのかにより、それぞれ、担当する部署は、港湾課、漁港課、耕地課、河川課等と分かれています。これらの管理者が最も多くのデータを所有している場合が多いですが、地元の市町村にまず訪ねるという方法もあります。一方、国土交通省の「〇〇港湾事務所」や「〇〇河川国道事務所」等の事務所が都道府県に数箇所設置されています。知りたい情報が明確な場合は、これらの行政機関への問い合わせも考えられます。

一方、地域を学ぶ手段としては、インターネットも有効ですが、現地を歩いてみる、地元の図書館や教育委員会が集める資料(写真)を見せてもらうことや、新旧の航空写真や地形図を見比べてみるなど、どの地域でもすぐ実行可能なものから、地元の古老、地域に詳しい人に話を聞いたり、古い写真を探してもらったり、あるいは、専門家と話しをして様々な知識を得ることも重要です。

また、地域の海辺が他の地域と比較してどのような位置づけなのか、他の地域の人々からどのように思われているのか等を知るためにも、例えば、万葉集等の歌集で詠われていたか、あるいは、〇〇百選等選ばれていないか等を確認することも参考になります。特に、この段階では、その個人はそれほど価値があると思っていない情報でも、非常に重要な情報の場合があることに注意し、個人が有する情報をみんなの共通の情報にすることが重要です。例えば、歴史的に重要な場所であったといった地域の人々が誇れる歴史が海岸にあった場合等は、海岸を考える大きな動機となります。

また、学習の一つとして、多くの団体は、海辺をフィールドとして観察会や体験学習を行うことを団体の活動と位置づけて行っています。そうして、海辺を人々が生活する場の一つとしてより身近にすることが、学習であると同時に、海辺と人々のつながりのあり方を探る一つの実践であるともいえます。このような学習を通して、さらに、地域の海岸の新たな価値や問題を発見することもあります。

## 【行政関係者の方々へ】

### <地域の人々の海岸への興味を喚起しましょう>

地域の人々が、地域を学ぶために、海岸や町を歩いたり、海辺の生物を観察したり、古老の話を聞くことで、今までとの変化を感じたり、問題となる箇所を見つけたりすることは、「里浜づくり」の活動を始めるきっかけに結びつく大きな要因となるものです。このため、例えば、住民が自発的に海岸を見学するといった場合において、行政の所有する船舶等を提供することで海から見学するとか、行政担当者が一緒に参加し、可能な範囲で説明を行う等、様々な支援の方法が考えられます。

これらの行動を通じて、行政にとっては人々との良好な関係を築くだけでなく、地域の人々が何を考え、何を求めているのかを把握できることから、実際の事業計画づくりや管理運営・利活用を検討する段階においても、スムーズに議論が進みやすく、合意形成にとってもメリットがあります。

### <データの収集、蓄積等を日ごろより進めましょう>

地域の人々が、地域を学び、問題点を発見するためには、様々な情報が必要となります。これらの情報は、地域の人々だけの努力では得られないものも少なくありません。この点、行政は、常日頃より、多様なデータを収集、蓄積しています。整備の経緯・状況、被災の履歴、海岸や背後の町の変遷、自然条件、生態系、地形の変化等、歴史を遡りデータを蓄積している場合もありますし、各種の将来計画、構想等も持っています。

このため、行政関係者は、関係行政機関と連携し、情報交換することで、これらのデータ収集を日常的に実施し、蓄積するとともに、図や表等を使ったわかりやすい整理を行っておくことが必要です。地域の人々などからデータの開示を求められた場合は速やかに開示するとともに、よく求められるデータについては、ホームページで閲覧可能とする等の対応が望まれます。また、地域の人々が入手したいと考えるデータが存在しない場合、将来の事業や管理に必要と考えられるデータについては、関係行政機関等と協力し、調査等を実施するなど、情報の収集に努めることが望まれます。さらに、関係する専門家等のリストを用意しておくことも地域の人々の「里浜づくり」の支援に繋がります。

### <事業の仕組みや制度等を折に触れて説明しましょう>

地域の海岸の管理者は誰なのか、どこまでを誰が管理しているのか、地域の人々には分かりづらいものです。また、事業制度や事業の仕組み、事業の制約なども、わかりにくい点があります。その対策として、例えば、地域の海岸とその周辺の管理区域がどのようになっているのか、地図に整理して、市民へ積極的に情報提供していくことや、具体的に絵で事業の制度や制約を示すことも考えられます。特に、事業上の制約については事業を進める上で、地域の人々に十分理解をしてもらわないといけません。

## < インターネットで調べよう! >

近年、情報収集に欠かせないツールとして、インターネットが挙げられます。Yahoo や Google などの検索サイトを用いると、百科事典や辞書に掲載されない事も含まれる幅広く鮮度の高い情報、各個人や団体が立ち上げたホームページやブログに掲載された実際の活動記録など、インターネット上にあふれている様々な情報を収集できます。

里浜づくりの活動をしている団体の中には、インターネットの特徴を活かして、ホームページを立ち上げて、地域を越えた広域的なネットワークをつくり、情報交換をしている団体もあります。以下にいくつかの例を挙げます。

全国鳴き砂ネットワーク	<a href="http://www.national-trust.or.jp/nakisuna/nakisuna.htm">http://www.national-trust.or.jp/nakisuna/nakisuna.htm</a>
沿岸松原サミット	<a href="http://www.nona.dti.ne.jp/~yumematu/">http://www.nona.dti.ne.jp/~yumematu/</a>
日本カブトガニを守る会	<a href="http://www.hachigamenet.ne.jp/~mayu-shy/page6.html">http://www.hachigamenet.ne.jp/~mayu-shy/page6.html</a>
日本ライフセービング協会	<a href="http://www.jla.gr.jp/">http://www.jla.gr.jp/</a>

また、国土地理院のホームページには、地形図や航空写真が掲載されています。

地形図閲覧サービス「ウォッチず」	<a href="http://watchizu.gsi.go.jp/">http://watchizu.gsi.go.jp/</a>
航空写真閲覧サービス	<a href="http://mapbrowse.gsi.go.jp/airphoto/">http://mapbrowse.gsi.go.jp/airphoto/</a>
国土画像情報（航空写真）閲覧機能	<a href="http://w3land.mlit.go.jp/WebGIS/index.html">http://w3land.mlit.go.jp/WebGIS/index.html</a>

## ＜ 「里浜づくり」の活動事例にみる主な「学習」の例 ＞

学習の種類		事例
情報を集める	全国ネット ワークのHP	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本カブトガニを守る会【笠岡港海岸、守江港海岸、東予港海岸】</li> <li>・全国鳴き砂ネットワーク【平海岸】</li> <li>・沿岸松原サミット【博多港海岸】</li> </ul>
フィールドで体験する	観察会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然観察会【中津港海岸、渥美海岸・西の浜海岸、二色港海岸】</li> <li>・ビーチコーミング【守江港海岸】</li> <li>・産卵・幼生の観察（放流会）【守江港海岸、二色港海岸、東予港海岸】</li> </ul>
	体験学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海岸で遊ぶ【酒田港海岸、渥美海岸・西の浜海岸、尼崎西宮芦屋港】</li> <li>・総合学習として行う【酒田港海岸、運天港海岸、渥美海岸・西の浜海岸】</li> <li>・自然体験学校【大洗海岸、奈半利港海岸、運天港海岸、阿児港海岸】</li> <li>・ライフセービング教室【運天港海岸、阿児港海岸】</li> <li>・地引網等伝統漁法【久手港海岸】</li> <li>・活動のリーダー養成【運天港海岸、尼崎西宮芦屋港】</li> </ul>
話を聞く	古老などの 地域の人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海の環境を学ぶ・お話を聞く会【渥美海岸・西の浜海岸】</li> </ul>
	専門家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門家による講演会【木野部海岸、平海岸、酒田港海岸、運天港海岸、文里港海岸、東予港海岸】</li> <li>・専門家による協議会【木野部海岸、中津港海岸】</li> </ul>
調査・研究を行う	調査 (データ収集)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・稀少水生動物調査【酒田港海岸】</li> <li>・海岸植物調査【奈半利港海岸、二色港海岸】</li> <li>・海岸漂着物調査【中津港海岸、笠岡港海岸】</li> <li>・海底状況の録画、環境データ収集【文里港海岸】</li> <li>・地域内外の砂浜の調査【平海岸】</li> <li>・オニヒトデ調査【運天港海岸】</li> </ul>
	大学・研究 機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元大学等による海浜植物・松原植樹指導【仙台塩竈港海岸、博多港海岸】</li> <li>・大学研究室への研究フィールドの提供と成果発表会【阿児港海岸】</li> </ul>



産卵観察会



地引網の体験



磯で遊ぶ



専門家の講演会



海底状況の調査



大学研究室の成果発表会

### (3) 仲間をつくろう

「里浜づくり」の活動は、個人や知人等、少数の人々から始められることが考えられますが、個人の人力や知り合いだけの力には限界があります。「里浜づくり」の運動を軌道に乗せていくためには、仲間が必要です。より多くの仲間を作ることで、個人の考えや思いをいろんな人と議論し、共有し、さらに、高めることができます。

地域づくりに関わる既存の組織と連携したり、イベント等の開催、さらには、各種メディアを活用することで、仲間を増やしていくことが考えられます。行政職員や専門的な知見を有する人への働きかけを行うことも、広い意味では、仲間作りです。

#### 【解説】

活動の始まりは、個人や地元の有志など少人数かもしれません。仲間の輪を広げていくためには、まず、それぞれの個人が参加している組織、団体等へ働きかけすることが考えられます。自治会(町内会)、PTA等の組織は、直接的な活動に結びつくケースばかりではないものの、自治会等であれば、地域の清掃活動、地域の環境を考えるという題材として海辺を検討することもあるでしょうし、PTAであれば、子どもの環境教育の場としての視点で取り上げるということもあるでしょう。これらの組織は、横のつながりもあるので、沿岸全体や行政区域全体、あるいは、山と海といった広がりも期待できます。

一方、地域づくりやまちづくりのNPOのような市民団体等が存在していれば、それらの団体への働きかけを行い、仲間を増やしていくということも考えられます。

これらの働きかけの方法としては、清掃活動、体験学習会や生物観察会等、現地で一緒に何らかの活動を行う方法や、花火大会や放流会等のイベントを行う方法や、講演会、座談会、ワークショップ等で議論を行う方法も考えられます。これらの活動を行う場合、行政機関の許可や届出が必要な場合もありますから、その機会に行政職員への働きかけを行うこともできます。

#### 【行政関係者の方々へ】

##### <イベント等に協力するなど、積極的かつ継続的に支援しましょう>

「里浜づくり」の活動は、短期間に成果が表われるものではありません。そして、地域の人々が、ボランティアで活動を継続することは容易なことではありません。事例では、5年、6年の月日を費やして成果が表われる場合も少なくありません。この間、地域の人々の参加を得て、活動の輪を広げるためには、様々な取り組みが必要です。取り組みには費用や人的な資源も少なからず必要です。

行政がシンポジウムや各種イベントを後援、協賛し、資金を提供したり、人的に事務的な作業を補助するなど、行政関係者が可能な範囲で公的に、私的に協力することが望まれます。行政職員も行政職員である前に地域の人々であるという意識が必要です。

また、行政の支援としては、各種の団体が協力することにより、より大きな運動が展開されるような場合、それらの団体同相互の連携を後押ししたり、パイプ役となることも期待されます。

## < 「里浜づくり」の活動事例にみる「仲間づくり」の例 >

### <自治会的な組織を生かした仲間づくり（青森港海岸の例）>

地元有志で地区の活性化やふるさと海岸活用方法について検討してきたが、埋立が進みふるさと海岸の姿が見えてくるにしたがい地区の町会においても議論が広がり、完成時には連合町会が主体となって清掃活動を行っていくこととなった。



### <多様な既存組織を生かした仲間づくり（仙台塩竈港海岸の例）>

野々島区、高等学校、共和会、NPO法人フラワーアイランド野々島メンバーが主として、塩釜市、地元新聞社、放送メディアが協力、野々島の花の島化に期待を持ち、協力が得やすく、首長も積極的に市民に活動広報し、他の団体にも支援要請し、近接市町村民にもNPO法人フラワーアイランド野々島の会員拡大を進めている。

### <多様な既存組織を連携した仲間づくり（守江港海岸の例）>

杵築市周辺には、「杵築市カブトガニを愛する会」「八坂川かっぱクラブ」「であいねっとわーくともだち」「NPO法人ABC野外教育センター」等の団体や個人の活動があったが、行政や各方面の協力を得てシンポジウムを開催したことをきっかけに、4つの組織を柔軟に統括する組織として「杵築市なぎさの研究会」が運営されている。

### <メディアや学校を活用した仲間づくり（平海岸の例）>

講演会の開催、市内小学校では臨時講師として学習サポートを行うとともに、地元FM局に出演するなど、地域の小学生から大人まで幅広い年齢層を対象に活動内容や活動の目的等を継続して発信することで、活動を支援してもらえる仲間を増やしてきた。

### <行政、NPOを活用した仲間づくり（渥美海岸（西の浜海岸）の例）>

渥美町生涯学習課が行っている『地域子ども教室』に人づくりという視点からの一教室として開設し、隊員募集を渥美町全域に広げた。活動場所の渥美町では「あつみNPO」に所属し、愛知県のNPOにも登録したことで、いくつかの組織と連携することができ、支援ボランティアとしての参加者がふえてきた。

### <大学の研究室を活用した仲間づくり（阿児海岸の例）>

8月に早稲田大学理工学部のテーマカレッジが、国府海岸を有する地区で行われ、大学院生によるワークショップやその発表会により、大学院生の考えや同大学の後藤春彦先生との意見交換を行っている。



### <海岸清掃や観察会等のイベントを活用した仲間づくり（東予港海岸の例）>

海岸清掃、観察会、幼生放流等、誰もが気軽に参加可能な様々なイベントを開催することで、カブトガニに興味がなくとも、多くの方に海岸の状況を知ってもらい、環境保全の大切さを理解してもらう機会を設けた。



#### (4) 今、何をしたいか、何ができるか、考えをまとめてみよう

学習活動や仲間づくりが進んできたら、自分たちの考えを整理しまとめてみましょう。自分たちの地域の里浜とは何なのか？…と。何が問題で、大事なものは何なのか、自由に意見を出し合い、地域の里浜像を検討してみましょう。そうすれば、具体的な目標が見えてきますし、より視野を広げた総合的な目標についての議論も始まります。自分たちの里浜像をまとめたら、子どもから高齢者までより多くの地域の人々と、その像を共有しましょう。

#### 【解説】

「里浜づくり」を検討するための知恵は、地域の中に隠れています。これまでの学習活動からわかったこと、仲間と話しながら考えたこと、古老の話にふと気づかされる大事なもの、また自分たちがだめにしてしまったこと、そうした発見をもとに自由に話し合しましょう。その中から、自分の地域の里浜像が生まれます。

わかりやすく具体的な目標（里浜像）を、みんなで立ててみましょう。できればさらに一歩進めて、より総合的な目標も考えてみましょう。

目標が立てられたら、みんなで納得がゆくまで話してみましょう。時には、妥協をしないで異なる意見をとことん戦わせることも必要です。そうすれば、多くの地域の人々と目標を共有することができるでしょう。

自分たちの考えを整理し、まとめるということは、良いことですが、一人よがりになってしまうことも考えられます。ですから、仲間をつくるという延長で、私的な寄り合い的な会合を持ちつつ、考え方を整理していくことも重要ですが、一方で、仲間でない人たち、意見の異なる人たちとの議論の場も必要です。また、市民だけで議論をしていると、実際の制度や事業等との齟齬が生じてしまい、せっかくまとめたものが、実現性のないものとなっている場合もあります。もちろん、実際の制度や事業等との整合を考慮せず、理想的な姿をまとめるということも重要ですから、どのようなまとめの内容を想定するかにもよりますが、多様な立場の人々と議論をする場を設けることが必要です。このように、出来るだけ多くの人に参加できる体勢、自由な議論が出来る環境づくりが求められます。そうすれば、多様な立場から、多様な意見が出され、より深い議論が可能となります。

このためには、小規模なワークショップや座談会等、地域の人々が手弁当で行える範囲のものから、シンポジウムや講演会等、広く地域の人や関係者に呼びかけて実施するものもあります。これらの会は、多数の人々の参加を前提にするのであれば、ある程度の施設、スタッフが必要で、そのための費用も必要となります。このため、これらの会は、「仲間をつくろう」と同様、行政等の協力を得ることも考えられます。

(里浜像を検討するためのヒント)

- 地域の昔のこと、地域が一番豊かであった時を思い出すと、大事なものが見えてきます。(木野部海岸)
- おじいさんやおばあさんの「経験知」を、言葉にしたり、数値にしたり、科学の目を持って分析しよう。(木野部海岸)
- 場合によっては地元の人たちの要望によって、地域の浜がどのように壊れていったのかという経緯を明らかにすることも重要です。(木野部海岸)

(里浜像—目標の例)

- できるだけわかりやすく、具体的な目標を立てましょう。(鳴き砂、カブトガニ、安全な海水浴場、浜をきれいに、松原の再生、身近な干潟の再生、など)
- できれば、具体的な目標を、総合的な目標に広げましょう。(防護は大丈夫か？環境は豊か？地域振興に役立っているのか？)

(里浜像を共有するためのヒント)

- 合意形成は、「中途半端なところでごまかさない」「喧嘩になる時があっても腹を割って話す」ことが重要です。(木野部海岸)
- 「鳴き砂、大事だよ、大事だよ」と言い続けていると、10年経てば、10歳の子どもの年齢になります。それで、大きな戦力になります。(琴引浜)

## 【行政関係者の方々へ】

### ＜検討・議論の場を積極的に提供し、自らも参加しましょう＞

様々な関係者に参加してもらい、検討・議論のできる場を設け、議論し、地域の人々が自分たちの考えをまとめることが重要です。行政関係者としては、これらの経緯を把握しておくことも今後の行政を進める上で重要です。検討・議論の内容にもよりますが、どのようなスタイルの検討形態が望ましいのか、メンバーはどのような人が望ましいのか等、地域の人々からの相談があれば、相談に乗り、協力しましょう。そして、積極的に検討の場・議論の場を行政としても提供するとともに、自らも参加しましょう。

### ＜地域コミュニティとの協働による防災まちづくりも里浜づくりに繋がります、対象となる海岸の防護の状況や目標を示しましょう＞

これまでの事例をみると、地域の人々の関心は、里浜の「環境」や「利用」が中心となります。そして「防護」については、被災経験のある方以外あまり興味を示しません。そこで、行政の出番です。

地域の人々が沿岸防災を議論するために・・・

- この海岸では、これまでどのような高潮・津波の災害があり
- どのような防護の目標を立てて施設を整備してきたか
- 現在の施設はどの程度の整備水準であるのか
- 施設で守れない部分をどう対応するか（ハザードマップの作成や避難路の告知等）

をわかりやすく説明し、住民と一緒に検討しましょう。

そうすれば、地域の人々に、防護の必要性や現在の施設の意味を理解してもらうことができますし、里浜像の議論もより深まります。

(5) 目標を実現するため、行動計画をつくってみよう、施設整備計画づくりにも参加しよう

目標を実現するためには、どのように「里浜づくり」を行うか、計画が必要です。自分たちの里浜を利活用するために、具体的な行動計画をつくりましょう。また、防護事業や環境整備事業が必要とされる場合は、地域の里浜を管理する行政とともに施設整備計画を立案しましょう。

【解説】

「里浜づくり」には計画が必要です。計画には2種類あります。行動計画（ソフト）と施設整備計画（ハード）です。片方のみが必要な場合も、両方が必要な場合もあります。両者とも、計画の5要素である「モノ・コト」「金」「人」「しくみ」「ところ」を、目標に照らし合わせて戦略的に検討しましょう。

一方で、行政が主体となって計画を検討する場合があります。海岸保全で基本計画を策定する場合や海岸で高潮対策や侵食対策の事業が行われる場合等です。このような海岸に関する事業、管理・運営、利用等の行政課題を検討する場合は、行政が様々な人の意見を聞く場や、方向性を決める会議として委員会、懇談会、協議会、ワークショップ等が設けられる場合もあります。最近はこの会議に地域の人々が参加するだけでなく、地域の人々が発案して、これらの会議を行政と一緒に開催し、議論を行うことも考えられます。

(行動計画づくりのヒント)

- 具体的な目標を実現するため、行動計画を立てましょう。できれば、計画書にまとめよう。

「モノ・コト」・・・地域の浜の観察会をしよう

(いつ、どこで、誰と／観察道具、カメラ、画板)

「金」・・・費用はどの位かかるのか、どうやって資金を集めるか

(概算費用を算出する、助成金をさがす、参加料を考える)

「人」・・・海辺の植物や動物に詳しい人に解説してほしい

(大学の研究者、博物館の学芸員、水産試験場の職員)

「しくみ」・・・観察会の実施体制をつくろう

(実行委員会をつくる、渉外や会計などの役割を決める、スケジュールを立てる)

「ところ」・・・観察会で実現したいことを明確にしておきましょう

(里浜の良さを理解してくれる人をふやしたい、子どもたちに里浜の自然にふれてもらいたい)

(施設整備計画づくりへの参加のヒント)

- 物をつくる時、撤去する時、どういう価値観でその海岸を見るかで、計画は大きく変わります。その時は、行政と住民が一緒のテーブルで議論できるようにしましょう。
- 自分たちがこれまでどのように海辺とのつながりを持ってきたか、何を大切に考えているのか、行政や専門家と議論しましょう。

「モノ」・・・海岸につくられる防護施設や緑地などと自分たちが大切に考えていることとの関係を考えてみよう

「金」・・・計画づくりにかかる費用や施設整備にかかる費用は、常に念頭に置きましょう、全体で有効にお金を使うよう考えましょう

「人」・・・古老に話を聞き、地域の中の知恵を発見しよう／先進的な試みをしている他地域

の人の話を聞こう／専門家の意見を聞こう

「しくみ」・・・・・・計画内容を議論する「委員会」、自分たちが学習する「見学会」、「ワークショップ」  
を設けるよう提案しよう

「こころ」・・・・・・施設整備を通じて実現したいことを明確にしておきましょう

(干潟の豊かさを守りたい、伝統的な祭りの場を残したい、鳴き砂やカブトガニを  
守りたい)

## 【行政関係者の方々へ】

### <行動計画づくりに参加してみましょう、支援できることもあるのでは？>

行政（市町村も都道府県も）は、地域の人々の行動計画づくりに参加しましょう。何か支援できることがあるはずです。

特に、資金のことは、いろいろな地域で活動している団体が共通に課題としています。地域の人々が欲する行動計画は、環境や利用を目的とするものです。したがって、市町村の行政マンは、いろいろな省庁の事業メニューを検討してあげましょう。大洗町のように文部科学省の子育て支援の事業を使って、新しい海岸利用の方法を検討したところもあります。また海岸管理者である都道府県は、直接の資金の支援は難しいかもしれませんが、道具や用具での支援、人的ネットワークを活用した人材の派遣などができるのではないのでしょうか。

地域の人々と一緒になって考えれば、知恵は出ます。

### <施設整備計画を地域の人々や専門家と協働して作成しよう>

「里浜づくり」が施設整備を伴うものであったなら、また防護施設の整備を「里浜づくり」の契機とするなら、行政は、これまで以上に地域の人々や専門家と協働して施設整備計画を作成しましょう。防護と利用と環境を総合的に検討しましょう。

そのためには、・・・・・・

- 地域の人々・専門家・行政が対等に議論できる場を設けましょう。
- 計画づくりの過程を開示しましょう。
- 制約条件（自然条件、コスト、事業制度など）を明確にしましょう。

特に、地域の人々にとってわかりにくいことは、事業制度による制約です。海岸事業の制度をよく説明し、できることとできないことを明確に提示しましょう。また、いつできるのか、事業スケジュールも地域の人々にとっては気になることです。折りにふれて提示しましょう。

ものづくりは、楽しい仕事です。地域の資産となる海岸を生み出すために、みんなで力を合わせましょう。

## <地域の人々と信頼関係をつくりましょう>

地域の人々が望む情報については、極力提供すべきですし、技術的な内容や制度、仕組み等、行政側が当たり前のことも、地域の人々にとっては理解できないこともあります。この点については、十分に注意し、判りやすく丁寧に説明をする必要があります。さらに、地域の人々は、行政が何かを隠しているような発言、あいまいな回答等に敏感です。おざなりの対応や義務でやっているといった印象も禁物です。これらの印象により、地域の人々と行政の間に溝ができてしまうと、まとまるものもまとまらなくなる場合もあります。信頼関係が作られるよう、誠意をもって対応しましょう。中には反対のための反対をする人もいるかも知れませんが、説明責任を果たすことにより、合理的なところに収束する（反対のための反対は通らなくなる）という気持ちで対応しましょう。

茅ヶ崎の海岸では、海岸管理者が持っている情報を公開し、必要な調査があれば調査を行い、可能な限り情報を提供しました。情報を提供すればするほど、議論は海岸管理者の想定していた方向に落ち着いたということです。

## <複数年を想定した戦略をもちましょう>

会の運営や資料の作成は、わかりやすい整理や意見・情報の翻訳などが必要となります。このため、地域の人々との間に技術的な専門家としてのコンサルタント等が入ることもひとつの方法と考えられます。

一方で、このような取り組みは、単年度では結論が出ない場合も多くあります。通常、海岸管理者の職員は人事異動により2～3年で変わってしまいます。コンサルタントについても、現在の制度では年度契約であり、価格による競争入札であるため、継続して業務を行うことができない場合もあります。海岸管理者もコンサルタントも替わり、以前の経緯を知らない担当者となった場合は、地域の人々の不信感を買うことも少なくありません。そのような場合は、地元自治体（市町村）が大きな役割を果たす必要がありますし、学識経験者等に座長として参加してもらう方法もあります。関係者は結論が出るまで変わらず担当していくことが本来、望まれますが、そのような状況の変化も想定した戦略をもつことも必要です。

## (6) 活動してみよう、実践してみよう

計画をつくることが出来たなら、いよいよ実践です。しかし実際に活動を始めてみると、なかなか目に見える成果が得られないと感ずることがあるかもしれません。しかし、気にすることはありません。活動を継続することで、おのずと仲間の輪は大きくなり、着実に「里浜」へと近づいていきます。まずは、自らの出来ることからはじめ、仲間と協力して活動を継続していきましょう。しっかり活動していれば、必ず、他の人々の評価で勇気付けられ、再び、活動の意欲がわき、新たな活動にチャレンジする気持ちになります。

### 【解説】

「里浜づくり」を実践するという事は、地域固有の海辺との付き合い方を模索し、海辺と地域の人々との良好な関係を築き上げていくことにほかなりません。ですから、「里浜づくり」の活動に一樣なゴールはなく、当初計画した「里浜づくり」も、実践していくことであらたな疑問や別の活動へと結びついていくことが多々あります。海辺を知り、海辺に対して働きかけ、さらに海辺を知る、こうしたサイクルが「里浜づくり」の活動を実践することだと言えます。

まずは、第一歩を踏み出すことです。できることから着実に始めることです。活動を継続していくことで、活動に賛同する新たな仲間が増え、場合によっては、活動に対する表彰や資金助成など、外部からの支持が得られることもあります。資金助成をお願いして回ることも活動の一環です。活動の輪が広がり、仲間が増えれば、当初は出来なかったことが出来るようになったり、知る事の出来なかった事実を知ることが出来たり、活動にも幅ができてきます。

そうはいつても、継続することほど難しいことはないと思うかもしれません。実際、活動資金の調達や、マンネリ化など、活動を継続するために多くの人々が腐心しています。そんなときは、全国の同様の活動をしている人たちと交流をしてみたり、全国的な組織の会合に参加してみたりすることも重要です。例えば、自分たちが積み重ねてきた活動をまとめ、様々な人と意見交換を行うことで、同様の悩みを抱えている人達に出会え、交流が始まるかもしれません。また、それらの人たちに評価されることは、積み重ねてきた活動の自信となります。〇〇賞を受賞したとか、新聞、雑誌やテレビで紹介されたといったことで、自信になり、新たな目標に向かって活動を活性化させた事例もあります。

全国には志を同じくする人々の全国的なネットワークや、活動資金を助成する制度など、活動を支援し、情報を提供してくれる様々な組織や制度があります。こうした組織や制度も積極的に活用し、あなたも「里浜づくり」を実践してください。

### 【行政関係者の方々へ】

#### <継続的な活動に繋がるイベントを展開しよう>

イベント等を行うことは、地域の内外の人々の関心を海岸に向ける上で重要です。しかし、一過性のイベントを行うだけでは、イベント自体が目的化してしまいやすく、効果はあがりません。イベントはあくまでも手段であり、イベントの目的を明確に持つことが大切です。とかく、イベントの当事者はこの罠に陥りがちです。地域の人々も行政もこの点を忘れず、実践をしましょう。

### <行政は地域の人々の活動を勇気付けましょう>

全国的な住民活動に対する各種の表彰制度や交流の場があります。これらは、行政や外郭団体等が行っているものが多いですが、行政がこれらへの参加を奨励・推薦したり、新聞、雑誌、テレビ等のマスメディアへの紹介を行うことにより、地域の活動は勇気付けられます。

### <海岸行政や地元行政は、関連する行政とのパイプ役になろう>

地域の人々は、行政の所掌範囲を意識した議論はしません。地域の人々が「里浜づくり」を実践すると、その対象は海岸にとどまらず、海のこと、港のこと、川のこと、道路のこと、背後の市街地や土地のこと・・・限りなく広がっていきます。地域の人々の活動が進めば、より広域的な目標設定がなされる場合も少なくありません。このような場合でも、他行政に働きかけたり、行政間での協力体制をつくれるよう、実現に向けたアイデアを提案することが望まれます。

## < 里浜づくりネットワーク 「さとはまネット」 >

海岸で活動をしている地域の人たちが、「里浜づくり」の意見交換会等を通じて知り合い、里浜づくり研究会のメンバーとも交流をしていくうちに、民間ベースで交流や情報交換ができないかと立ち上げたのが「里浜づくりネットワーク」です。現在は、準備会ですが、インターネットによるホームページを公開しています。ここでは、「里浜づくり」に関する様々な情報が記載されているとともに、相互にやり取りが可能な「意見交換掲示板」もあります。

ホームページアドレスは <http://satohama.net/> です。是非、覗いて、参加してください。



サイトマップ  検索 

最終更新日：平成17年2月3日

### NEWS / TOPICS

- 2005. 2. 3 「実践！里浜づくり」に、里浜づくり活動モデル事業の成果（速報）を掲載しました。
- 2005. 2. 1 里浜づくりネットワークの会員を募集しています。
- 2005. 1. 25 ホームページを開設しました！



今月の1枚：沖縄県塩屋海岸の海神祭

### 里浜づくりとは

-  里浜づくり宣言 [0.2MB]
-  里浜づくり宣言のねらい [1.1MB]
- 里浜づくりの取り組みメニュー
- 里浜づくりパンフレット <国土交通省港湾局>

[連載リレーコラム] (準備中)

- 里浜づくりへと続く道 /  過去の記事

### 実践！里浜づくり

- 港湾・海岸での取り組み事例
- 意見交換会について
- 里浜づくり活動モデル事業の成果（速報）

### 話そう&つながろう！

- 相談員リスト（準備中）
- 意見交換掲示板
- 会員サイトリンク（募集中！）

### わたしたちについて…

- 里浜づくりネットワーク準備会について

メールでのご連絡・ご質問はこちらまで  [web@satohama.net](mailto:web@satohama.net)

Copyright©2004- 里浜づくりネットワーク準備会 All Rights Reserved.

海神祭の活動サイトも  
あなたへ…



## 「里浜づくり」への期待

平成15年5月の“里浜づくり宣言”以降、国土交通省港湾局では里浜づくりにおける全国の事例を調査するとともに、地域の様々な主体が里浜づくりに取り組むきっかけをつくる活動を各地の地方整備局等とともに進めてきました。

今回、これらの調査成果などをもとに、里浜づくり研究会で“「里浜づくり」のみちしるべ”をとりまとめて頂きました。“みちしるべ”には、里浜づくり活動の初期段階を中心に参考となる情報が豊富に掲載されています。これで、2編の提言が里浜づくり研究会から出されたこととなります。“里浜づくり宣言”や“みちしるべ”を参考にして、活動を始める地域がさらに広がることを期待するとともに、国土交通省港湾局としても可能な支援を続けていく所存です。

“みちしるべ”にも書かれているように、里浜づくりは地域の人々が主体的に問題点を発見するところから始まります。しかし、地域の人々がその活動を継続し、よりよい里浜をつくっていくためには、地域における人々と行政との良い関係（馴れ合いでも対立でもなく、ほどよい緊張感を持って話し合い、協働できる関係）が必要になることも事実です。特に、地方行政の方々には、里浜づくりを皆様の行政自身のこととして取り組む姿勢を期待します。急がば回れで、新しい海岸行政の「かたち」を実践して下さい。

最後になりますが、中津港海岸、奈半利港海岸、木野部海岸、琴引浜の関係者をはじめ、平成16年度「里浜づくり活動モデル事業」にご協力頂いた地域の方々、さらには「里浜づくり研究会」にてご指導頂いた委員各位に深く感謝の意を表します。

平成18年3月

国土交通省港湾局海岸・防災課長

内村 重昭